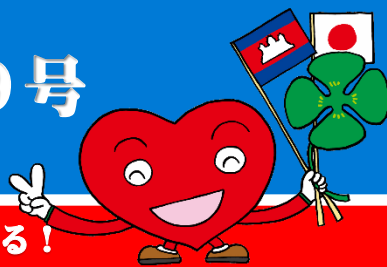


NPO Srolanh Project since2010

# スロラニュー通信 第9号

平成 29 年 5 月 8 日発行

カンボジアの支援の必要な子ども達の「生きる」を支援する！



## チョムリアップスオ！ご挨拶

NPO 法人スロラニュープロジェクト代表 飯塚由美子



当団体に対し、いつもご理解ご協力ありがとうございます。

NPO 法人スロラニュープロジェクトも地道な活動ではありますが、たくさんの方たちからご支援・ご協力を頂き、一歩ずつ前進していることを確信し、皆様への感謝の思いでいっぱいです。

そして、3年前、まだまだ活動も未熟であった当団体に手を差し伸べてくださった大阪の交野ロータリークラブ様からは、当団体が平成 24 年に建設したスロラニュー小学校に図書館を建設する為の資金を頂戴し、この度見事な図書館が完成しました。残念ながら、交野ロータリークラブ様のご支援は3年間ということで、平成 28 年度の図書館建設を最後に終了いたしました。活動が始まったばかりで不安だった時、かたの福祉会奥理事長様に出会い、それから交野ロータリークラブ様とのご縁が始まりました。当団体を永く見守り続けてくださった奥理事長様はじめ交野ロータリークラブの皆様、本当にありがとうございました。

活動を開始した時から始まった、『継続』の責任を重く抱きつつ、カンボジア王国シェムリアップ州において、NPO 法人スロラニュープロジェクトという小さな小さな団体が、大きな責任を持って、目の前の一人を救うことに力を注ぎ続けたいと思います。



## 肌で感じたこと ～スロラニュープロジェクト支援活動に参加して～

大学生 大森佳純



父が三年前から参加しているスロラニュープロジェクト。毎回活動後に配られる DVD を家族で観て自分もいつか行けたらな、と思っていた。

今回初めてそのスロラニュープロジェクトに参加するにあたって、目標を二つ掲げていた。一つ目は「感じる」ということ。画面越しに見ていた世界に直接行き、共に活動し、実際に肌で感じることにしようと思っていた。二つ目は「自ら進んで動く」ということ。資格や知識など何も持たない高校生が行って、役に立たなかったと思われるような四日間にしたくないと考えていた。これまでに行った福祉施設でのボランティア活動の経験を活かしてやってみようと思っていた。

初日は孤児院センターでの活動から始まった。トゥクトゥクでの移動を楽しみながら孤児院に着くと、子どもたちがわらわらと人懐っこい笑顔で近寄って来てくれた。私たちの訪問を楽しみに待っていたのだなと感じられた。カメラを向けると近くにいる友だちも誘ってポーズをとってくれた。また、年長児が年少児のためにおもちゃの準備をしてあげたり、食事のお世話をしたり、といった姿も見られた。私は「ウサギとカメのその後」というエプロンシアターを新居さんと坊垣さんと通訳のパンナさんと一緒に披露した。練習をする時間があまりなく、不安なまま行ったため自分の中では大成功をおさめることができず悔しかった。でも、子どもたちのリアクションが少しあって安心した。



孤児院センターでは子どもたちとのふれあいだけでなく、障がい児デイサービスも行われた。子どもだけでなく親同士が繋がることのできるいい機会だ。同じ境遇にいるからこそ分かり合え、助け合うことができるから、とても意味のある時間だと感じた。

二日目の午後からは、ブラッシング指導と算数の授業が並行して行われた。私はブラッシング指導で子どもたちの染色の手伝いをした。言葉が通じないため、どうやって説明すればよいか迷ったけれど、ジェスチャーを交えて語りかけると意外と分かってくれる子が多かった。そして理解できた子がまわりの子に教えていき協力し合って参加してくれる姿が見られてうれしかった。また、ここでは宇都宮先生の奥さんと通訳のピッチさんと歯みがき啓発のエプロンシアターを披露した。これは何度も行うことができたため落ち着いてできたし、初日に行ったものよりも手ごたえを感じる事ができた。

三日目のワットボー一小学校では歯科部にとって最大の難所である 463 名のブラッシング指導が行われた。ここでは計画することとメンバーみなさんの協力の大切さを感じた。事前の綿密な打ち合わせと、スロラニュー小学校での予行演習があったからこそできたことだ。また、同じことを何度も繰り返すうちに手順に慣れ、精度が上がっていき後半クラスほど質の良い指導が行えたと思う。

最終日のアプサラ機構での救急救命講習は高橋隊長の上手な喋りで参加者の方々も楽しそうだった。救急チームの息の合った実演も見応えがあり、私にとっても勉強になった。真面目な方が多いため、休憩中にメモをとったり、講習の様子を携帯で撮影、録音をしたりしている姿が多く見られた。年上の方に教えるのは抵抗があったけれど、少しアドバイスすると笑顔で対応し、すぐに改善してくださりうれしかった。もっと積極的に声をかけにいけばよかったと思う部分もあった。

活動の間に何度か訪れた村では、家屋に衝撃を受けた。頑丈な素材で作られている家もあれば、木で作られた床と屋根のみの家もあった。日本では考えられない物の少なさにも驚いた。これが本当の必要最低限の物なのかと思った。このような状況でも生活続けるカンボジア人の「生きる強さ」というものを感じた。

四日間の活動のなかで、参加者の方々のスロラニュープロジェクトに対する思いや考えを聞いたり、感じたりすることができた。そして様々な職業の方と出会い、お話をすることができた。そのなかで強く思ったことは、「私も早く役に立つ力を身に付けたい」ということだ。救急救命士、歯科医師、教師、といった資格を持つ人々はこのような活動に必要とされる存在だと感じたからだ。私は春から作業療法士になるために大学へ行く。そこでたくさんの知識を身に付けたい。また、自分はこのような経験を 18 歳ですることができて恵まれているなと思った。この経験を決して無駄にはならないと思う。そしてこのようなボランティア活動を同世代の仲間たちに知ってもらって、興味をもってもらえるよう、広めたい。

孤児院の子どもたちと晩ごはんを食べた日、「See you again!」とか「またね」と言ってお別れをした。一回行っただけでは分からないことがたくさんあるだろう。このような活動は継続することに意味がある。二回目、三回目と続けて参加したい。

## リミテッド ～2017年2月支援活動の振り返り～

スロラニュー歯科部 歯科医師 大森茂樹



父としての参加ははじめてだったけれども、娘がそばにいてくれたおかげで、とても助かったなあ、というのが実感。相談相手になってくれるし、緩衝役になってくれるし。

限られた時間内に、限られたメンバーで行わなければならない活動やはじめての活動もあり、今回の個人的なテーマはリミテッド。18 歳になった娘と残された時間は限られているだろうから、その意味でもリミテッド。限られているからこそ、集中して、慎重に取り組もうってわけ。

これ、いいテーマだなと我ながら思いつつ現地での数日を過ごしていました。今を大切にやる気持ちが湧いてくるわけですよ。限られているのだからイメージするだけで。

だから、これからはいつだってそういう気持ちで過ごしたいなと思います。この限られた時間の中で、何をするか。ちょっときついな、というくらいがちょうどいいのかも。もうあんまり若くもないし。人生は、期間限定。

貧しくも子らの笑顔は輝いて裸足でかけて綱引き玉入れ  
異国での夜の屋台はワンダラー娘と分けるパイヤサラダ  
お互いに刺激与えて与えられ年の離れた友こそ我が師



## 命の授業（救急救命講習）～2017年2月支援活動の振り返り～

救急救命士 高橋茂樹



2017 年 2 月度の救命講習は、恒例となった孤児院での年長者に対する救命講習と、わたしたちのスロラニュー小学校の本校にある、ドントロー中学校 1 年生。そして、スロラニュー現地スタッフのパンナさんの取り計らいで、政府機関のアプサラ機構（アンコール地域遺跡保護管理機構）への救命講習となった。特にアプサラ機構への講習は、国の公的機関との繋がりができる第一歩となるべき講習でもあることから、今回私の同僚で、現役の救急隊長の辻本君と、毎回同行してくれている猪狩君の 3 名を中心として、スロラニュースタッフ全員で協力し救命講習を実施した。

18 日、孤児院年長者への救命講習は 4 回目で、手技についてはよく理解されており、心強く遅く思えた。今回から日本から持ってきた、トレーニング用の AED トレーナーを使った講習を取り入れた。まだまだ、カンボジアでは AED は身近なものではなく、





唯一テレビドラマで電気ショックをする場面をみていたらしく、実際には初めてみる器具ではあったが、AEDの取り扱いと実技を行う。今後この地域でもメジャーとなっていくAEDを今から知ってもらい、クメール語でのメッセージが流れるAEDが普及する頃に、彼らが良き指導者となっているよう期待を込めて、今後もAEDを取り入れた、救命講習を指導していきたいと思う。



20日、ドントロー中学校1年生への救命講習は、これからのカンボジアを背負っていく子供たち、毎年対象となる中学1年生を指導対象として実施して今回で2回目となる。心肺蘇生人形14体、各人形に4人ずつ配置し、クメール語のテキストを配布、応急手当ての重要性から始め心肺蘇生法（胸骨圧迫）止血法、熱中症など、日常生活での緊急時の対応を指導した。全員よく聞き、胸骨圧迫もスムーズに行えるようになった。今後も、新1年生に対しての、救命講習を指導していく。数年後には、スロラニユ小学校の子供たちが受講生となることを楽しみにして。

21日、アプサラ機構職員40名への救命講習。このアプサラ機構は、カンボジア政府アンコール地域遺産整備機構といって、アンコール遺跡群の保護・管理・修復、遺跡エリアの開発・ビジネスの認可等を行う組織で、過去に欧米の方の救命講習を受講されたが、それが身につかなかったようで、現地スタッフのパンナさんを介してのオファー。内容は、観光客が遺跡等で事故があった場合の応急処置を指導してほしいとの要望があり、日本で実施する講習内容カリキュラムを作成。講習については、心肺蘇生法から始まり、止血法や骨折時の処置方法、熱中症対策などを記載した、クメール語のテキストを配布資料として作成し、指導にあたった。受講生の職員は、初めてみる蘇生人形や手技に戸惑いはあったようだが、繰り返し、ゆっくりと時間をかけて指導することで、最後には、胸骨圧迫の深さ・リズム・拡張（リコイル）も全てマスターされていた。休憩をはさんで、止血法や骨折時の応急処置を指導、身近なものを使っての骨折の処置法、止血の仕方を指導した。最後の、質問の時間では、さっと手が上がり受講生の意識の高さが伝わってきた。言葉の壁や生活習慣の違いはあるが、命の大切さは世界共通で、救命講習については、指導者も受講者も通じあえるものがあり、有意義な講習が実施できた。今後も継続して、アプサラ機構への救命講習を実施することとなった。今回は、遺跡で観光客が怪我をした時の応急処置をメインにしたカリキュラムを計画中。もちろん胸骨圧迫も含めて。スタッフの皆さん、アシストありがとうございました。



## パット君、ソーン君、ピンちゃん、あなたたちを見えていますよ。～2度目の支援活動～ 元教師 廣瀬佐和子

「ハロー。」「ハロー。」「グッ モーニング。」孤児院の庭にトゥクトゥクが入っていくと子どもたちが嬉しそうに駆け寄ってきた。活動一日目、孤児院を訪問した。その子どもたちの中に見違えるように力強い笑顔を見せている車椅子のパット君の姿が見えた。前回、私は、パット君兄妹の境遇を直視することが出来なかった。私は、目の前にある生存を脅かす貧困に圧倒され、身体が引いてしまっただけだった。だから、パット君が孤児院に入ってケアしてもらっていると聞いていたので安心していただけの「パット君と向き合えるかな。」と何となく自分自身に不安を抱えての孤児院再訪だった。再会したパット君は、他の子どもたちと一緒に、自分にできる遊びやゲームを楽しんでいた。友だちが跳ぶ縄跳びにニコニコして声援を送り、縄に掛かったら、ああ残念という表情をし、面白いことには大きく口を開け、歯を見せて笑っていた。健康的になり、表情豊かになったパット君を見て「ああ、たくましくなったな。」と嬉しい気持ちになった。屈託のない笑顔の彼から、「自分は、大切にされているんだ。」と実感しているのが分かる力強さがあった。やっぱり、人は人によって支えられ、希望を糧に生きていくんだなあという思いを深めることができたひと時だった。



活動二日目、スロラニユ小学校を訪問。村へのデコボコ道をトゥクトゥクに揺られて到着すると、乾季のためか少し埃っぽい小石や雑草に覆われた校庭に、もう大勢の子どもたち、保護者、村人たちが集まっていた。

その中から、「この子、あのピンちゃんやで。見て。円形脱毛症が治っとうやろ。」と、須藤さんが笑顔で教えてくれた。須藤さんの横に来て真っ直ぐな眼差しで私たちを見つめる瞳。一瞬にして「あ、あの子。」と私の中に記憶が蘇ってきた。ちょっと自信のなさそうな子だったな。わたしは、一年半ぶりの訪問だった。当然だが、ピンちゃんは背が高くなり、少し、線が太くなっているなどと思った。2H ぐらいの筆圧の人生から、HB の人生の軌跡をつけているような、とでも言えば伝わるだろうか。さらに、大勢の子たちの中から、もう一人、ソーン君を見つけたので嬉しくなった。ソーン君は、前回、パズルや、形の弁別などの教材を使った学習で、集中力があまり続かなかった子だった。ソーン君も背が高くなって、近づくと逃げないでこちらに来てくれた。「元気？」と聞くと恥ずかしそうに

黙って微笑んだ。周りは、大勢の子どもたち、保護者、村人でワイワイとしているのに、何だかソーン君の佇まいは静的で、弾けたところがない。はにかみ屋さんだからなのか、ちょっと自信無さげな様子は変わらないなど感じた。

校庭の端には、明るいオレンジ色の屋根、クリーム色の外壁をした10坪足らずだろうか真新しい図書館が建てられ、今日の竣工式を待っていた。屋根の白い鬼瓦が切妻の両端からグッと空に力強く突き出し、空の色とのコントラストが美しい。でも、子どもたちが、その周りで遊んでいるとインド辺りのおとぎ話に出てくる建物のようにもありがたらしい。ここで、スロラニユの子たちが、本に親しんでくれると本当に嬉しいな、「一粒の麦」という素敵な言葉があるけれど、「1冊の本」という言葉も有りだなあとふと思った。

アクシデントも怪我もなく竣工式、運動会と無事に終わり、午後から子どもたちと勉強した。日本じゃ運動会の後の学習はちょっと考えられないけれど、子どもたちが教室一杯に集まってくれていた。

10までの数の学習と簡単な図形の学習の2部構成だった。

10までの数の学習は、「モイ、ピー、バイ・・・」と数えながら小さい子たちも大きな声で数え、数のブロック図を見てすぐに幾つが分かっていたようだったので指導者と学習者の一体感を感じた。

図形の学習は、どんどん自分で進んで行ける子もいるが、やはり1、2年生ぐらいかと思われる子にはとまどいがあったかなあと感じた。年齢差もあり大勢の子どもたちを対象にした全くのぶっつけ本番。



日本でも異年齢の子どもたちを対象に授業をするのはたいへん難しいのだから、通訳のパンナさんがいるとは言えこのカンボジアで大勢の子たちに授業をするのは勇気の要る挑戦だと思った。図形の学習が終わった後、なんとソーン君がそっとプリントを渡しに来てくれた。彼がそのまま教室から出て行かないでちゃんとプリントを渡しに来てくれたことが嬉しかった。前回のときは、いつの間にやらいなくなっていたのだから。「頑張ったね。」の意味をこめて私は、「ブカイ。」と声をかけた。もっと適切な言葉がけが出来たらよかったのだがその褒め言葉しか知らなかった。その時ふいに、私は、赤ペンを持ってくれば良かったなと思った。ちゃんとできていた子どもたちに大きな花丸をしてあげたかった。カンボジアでは先生方は、正解のときどうするのかなあ・・・とそんな些細なことを思いながら授業のアシスタントを終えた。

最後に、今回、石倉さんが会食の席で「『あなたの側に居ますよ。見えていますよ。』というメッセージを送ってあげられたらいいんです。そうすれば、言葉ではなく通じるものがあるんです。」と仰っておられた。石倉さんの意図（障がいを持つ現地のお母さんを励ます言葉として語られたと思うのだが）とは少し違うかもしれないけれど、その言葉に私も少し勇気を頂いた。というのも、私は、スロラニユの仲間に入れて頂いているけれど、普段これといって十分な支援や協力ができていないので、こんな風にたまたま現地活動に参加するような形では何だか心苦しいなあとの思いがあった。だから、石倉さんの言葉は、そんな私にも支えとなる温かい言葉だった。ささやかでもパット君や孤児院の子どもたち、また、ソーン君、ピンちゃんといったスロラニユ小学校の子どもたち一人ひとりの顔を思い浮かべながら、「あなた達を応援していますよ。」というメッセージをこれからも送り続けることができたらと思う。

## 2017年2月の主なカンボジア支援活動報告 ～2017年2月18日～2月21日～

2/18(土)

○障がい児デイサービス（障がい児）／救急救命講習（孤児院年長児童）・エコバックお絵描き（孤児院年少児童）

午前は恒例の障がい児デイサービスはいつもの孤児院センターで取り組みました。参加していたこどもが参加できなくなることもあれば、今回初参加の子が3名。センリナーちゃん（1歳8ヶ月）、サットくん（5歳）、新たに孤児院に入所したスレイナンちゃん（6歳）です。レギュラーメンバーはパット君、リアサーちゃん、デザイン君、チャリアーちゃん、ヴァンナリちゃん、そしてビスナーちゃん。障がいの種類や程度がさまざまな9名のこども達が集まってくれました。今回のプログラムは孤児院のこども達も楽しめるおもちゃ遊び（楽器・ボーリング・卓球など）、リズム遊び、歯科健診・口腔ケア、保護者の皆様に大人気の衣服等寄贈、聞き取り調査、紙芝居やお絵描き、そして洗体支援等です。新規のお母様たちも初めは緊張した表情で参加されていましたがレギュラーメンバーのお母様と話をしたり、デイサービスの温かい雰囲気であったり、そして何より事前に何度も家庭に訪問して当団体の説明を行い、関係を築いてくれた現地スタッフのパンナさんの存在で次第に緊張もほぐれ最後はレギュラーメンバーと同じようにリラックスした様子で参加されていました。







午後からは、孤児院センター入所児童対象の救急救命講習とエコバッグにお絵描きを行いました。年長児は高橋救急救命士による救急救命講習。今回は高橋の他に救急救命士2名が参加。初参加の辻本さんと2回目の猪狩さん。場所はいつも障がい児デイサービスで使用する食堂とは別の棟にある図書室。以前は使用不可であったが、何度も孤児院で活動してセンター長との信頼関係が出来たからこそ、当団体の要望を受け入れて頂けるようになり、よりスムーズに支援活動に取り組めるようになってきたことは嬉しい限りです。

孤児院センターでの救急救命講習は毎年2回ほど同じプログラムで実施している。何度も繰り返し聞くこと、取り組むことで、記憶に残り、反復してきたからこそ、胸骨圧迫もスムーズに取り組めるようになってきた。心臓の位置も前は左側と答えていたが今では正確な場所を答えるこどもが増えてきた。大切なことは継続すること！彼らが救急救命講習を受講し、習得することで社会の役に立ち、誇れる日が来てくれたら・・・。



孤児院センター年少児童はエコバッグお絵描き教室に参加しました。担当はNPO法人ネットワークながたの理事長で自称絵心のある石倉が担当。今回初参加の芸大出身の坊垣さんもお絵描き教室に加わり取り組みました。色はオレンジ・ブルー・グリーンの3色で、という指定のなか、お絵描きに関しても以前からカンボジアに訪問した際はこども達には画用紙に描いてもらうことに取り組んでいた為、各々物おじせすのびのびと描いていました。村の小学校にはない「美術」の授業。今後も楽しみながらお絵描きをして少しでもこども達の発想や感性を育めるように取り組んでいきたいと感じました。



2/19 (日)

○スロラニユ小学校運動会 (スロラニユ小学校全生徒) / スロラニユ図書館竣工式 (交野ロータリークラブ様出席)

第4回目のスロラニユ小学校運動会。小学校に柵ができて、交野ロータリークラブ様のおかげで図書館も完成したので、運動場はやや狭くなりましたが、運動会実施にはあまり支障はなく開催することが出来ました。今回は普段あまり遊びの中で行わないと思われるカンガルーリレーや二人の連携が必要なデカパンリレーなど新しい種目も用意して行いました。今回のプログラムはカンボジア国歌斉唱国旗掲揚からはじまり玉入れ、麻袋に入れてジャンプして競い合うカンガルーリレー、サッカーボールを使ってのドリブルリレー、大きなパンツに二人が入って競走するデカパンリレー、三人四脚リレー、そしてみんなが楽しめるカンボジアの人気競技綱引きでした。現地スタッフのパンナから、綱引きについてはアンコール・ワットのレリーフにある乳海攪拌の争う両者が力を合わせて引っ張り合う様は綱引きに似ていることからカンボジアでは大変馴染みがあり。引っ



張り合いをして、勝っても負けても互いになかよく、というふうにかンボジア人は解釈していて、綱引きはカンボジア人もやりますよとのこと。例年と同じように男女に分かれて競技を行い、観戦に来た村の人々も巻き込みながら、全ての競技を大きな怪我なく大盛況のもと運動会を終えることが出来ました。※カンガルーリレーでは転倒することが予想されていましたが、みんな運動神経がよく、ほとんどのこども達が転ぶことなく取り組めていました。



スロラニユ小学校運動会が終了して、しばらくした後、スロラニユ小学校図書館の竣工式の為に交野ロータリークラブの皆様がスロラニユ小学校にご到着されました。この度、スロラニユプロジェクトと交野ロータリークラブの仲介役として大変ご尽力いただいた社会福祉法人かたの福祉会理事長の奥様をはじめ、スロラニユプロジェクトの活動に賛同していただき当団体が苦しい時期の3年間資金援助していただいた交野ロータリークラブの皆様を乗せたバスがコムルー村スロラニユ小学校に到着したときは感慨深いものでありました。交野ロータリークラブの皆様をスロラニユプロジェクトメンバー、そしてスロラニユ小学校のみんなでご迎え、荷物を運びました。荷物の中にはハブラシもあり、確認すると、エビスとラピスの子ども用でした。カンボジアで歯科支援を行うスロラニユプロジェクトとしては、クオリティの高いハブラシが大量に寄付していただけることは、たいへん嬉しいことでした。結局、後から船便で送っていただくものも含めて約4万本も寄贈していただけたとのことでした。

エメラルドブルーのポロシャツを身にまとった交野ロータリークラブの皆様がご到着されたところで竣工式が開始されました。交野ロータリークラブ様からの目録贈呈、スロラニユ小学校ラット校長からの謝辞、交野ロータリークラブ様への感謝状の贈呈、記念撮影、そしてテープカット。交野ロータリークラブの皆様からは歯ブラシの他にも文具や衣料品、図書館への本等、たくさんの寄贈品をいただきました。過密なスケジュールにも関わらず常に笑顔でスロラニユ小学校のこども達に接して「支援した側」という立場を一切感じさせずに記念撮影ではカンボジア人の後ろに並ばれ撮影されるなど、大変清々しい竣工式でした。交野ロータリークラブの皆様、本当にありがとうございました！



スロラニユ小学校図書館竣工式終了後は交野ロータリークラブの皆様は昨年、寄付で当団体が支援しているシムリアップ孤児院センターに温水シャワーを設置させていただき、またキッチンの改修工事もさせていただいたので、その後の状況を視察する為にシムリアップ孤児院センターに移動されました。スロラニユ小学校ではこども達にブラッシング指導と算数の授業を行いました。ブラッシング指導の責任者はスロラニユ歯科部の歯科医師大森。今回は障がい児を対象とした特別支援授業ではなく、低学年全員を対象とした算数の授業をスロラニユプロジェクトの元教諭である須藤がリーダーとして取り組みました。ブラッシング指導チームでは、兵庫県神戸市垂水区で院長として歯科医院を開業されている歯科医師宇都宮先生と宇都宮先生の奥様、算数の授業チームは元教諭である新居先生と廣瀬先生が加わり、日本で培われた





経験を活かし充実した活動に取り組むことが出来ました。最後に参加した子ども達にノートと飲み物を差し上げました。



2/20 (月)

○ワットポー小学校ブラッシング指導 (幼稚園+小学1年生) / ドントロー中学校救急救命講習・ブラッシング指導 (中学2年生)  
バンゴア村井戸建設視察 / 新規支援児童家庭訪問 (サット君・センリナーちゃん)



午前には昨年から親睦を深めているシェムリアップ市内にあるワットポー小学校にブラッシング指導の為に訪問。ワットポー小学校は寺院に併設された生徒数6370名、教諭116名のマンモス校です。以前、JICAから派遣された日本人音楽教師がこの学校に音楽の授業を定着させ、教育カリキュラム構築に尽力され、またキムチェン校長においても日本に何度か来日され、日本の教育を手本とした学校運営をされていることから子ども達に関して挨拶はもちろんのこと、清掃や整理整頓がしっかりと根付いており、手本とされた日本ではありますが、こちらが見習うべき部分が多い小学校です。今回、当団体から校長から頼まれていたピアノカ約100台とピアノカの吹き口(パイプ)200本を寄贈しました。

ワットポー小学校にて音楽隊の演奏で当団体訪問の歓迎をしていただいた後、450名もの小学1年生と幼稚部対象に制限時間2時間という制約の中、紙芝居での歯磨き啓発、歯垢染色液(タブレット)を使用しての歯科ブラッシング指導に取り組みました。日本人スタッフは紙芝居・染色液と各チームに別れて縦横無尽にクラスを移動して、クラス担任の先生方のご協力もあり、無事に2時間以内に全クラスに指導することが出来ました。ワットポー小学校の子ども達は毎日学校でブラッシングをしており、日本の大学が定期的に入り、歯科支援を行っているのでスロラニプロジェクトとしての歯科支援については今回の活動で終了したいと思います。



午後は2班に分かれて活動に取り組みました。一つは西村清治様寄贈の井戸の状況把握の為にバンゴア村に訪問。その後新たに支援することになった障がい児宅訪問グループ(サット君・センリナーちゃん)ともう一つはドントロー中学校に訪問して約60名の中学2年生を対象とした救急救命講習とブラッシング指導グループ。※救急救命講習の報告については高橋茂樹の「救急救命講習2017年2月支援活動の振り返り」をご参照ください。ブラッシング指導についてはドントロー中学校で数回、指導を行っていることもあり、今回は講義に力を入れて指導を実施。カンボジアでは大人も乳歯はむし歯になってもいいと思っているので正しい知識定着に努めました。歯磨きの大切さを理解していても1\$のハブラシ購入をためらってしまう貧困という課題は根が深い。口に合った大きさのハブラシを買うことができない子どもに、子ども用のハブラシを配るといった活動は重要であると感じます。特に農村部では。



2/21 (火)

○アプサラ機構救急救命講習(スタッフ) / 支援家庭訪問(故チャンニー君家族・リナー君家族)

※救急救命講習の報告については高橋茂樹の「救急救命講習2017年2月支援活動の振り返り」をご参照ください。



2017年2月支援活動参加者の皆様(左から)ピッチ・宇都宮寿子・伊藤・下林・宇都宮淳・廣瀬・新居・須藤・坊垣・大森佳純・飯塚・高橋・辻本・猪狩・大森茂樹・石倉・ソパンナ・タン (撮影) 服部 ※敬称略

## 日本での主な活動報告

平成29年3月19日 M・Y・S Kobe 中村美智留様から講演のご依頼を頂きネットワークながた「さくら」にてNPO法人スロラニプロジェクトの活動紹介等を代表の飯塚を含め4人のプロジェクトメンバーで行って来ました。現地での活動紹介は講演時間のほぼ大半を動画という形で、説明させて頂き、その後は出席者の方を3グループに分けて各グループにスロラニメンバーが入り、より細かい活動内容や現地の様子を説明させて頂きました。スロラニプロジェクトメンバーは日本でも障害福祉や教育現場といった様々な分野で仕事をしながらカンボジアでの支援活動を行っています。二足の草鞋を履きながらの取り組みであるためになかなか啓発活動にまで手が回っていないのが現状ではありますが、一般の方々に活動を知って頂く今回のような時間を過ごすことで改めて啓発の大切さを感じました。参加した皆様が少しでもカンボジアに興味を持っていただき、また少しでも日本や世界が抱える課題に関心を持っていただけたら嬉しいです。今回、このような機会を提供して頂いたM・Y・S Kobeの皆様本当にありがとうございました。



平成29年4月17日 芦屋川ロータリークラブ様からお招きいただきまして、卓話の時間にスロラニプロジェクトの活動紹介をさせていただきました。日本と違い社会保障のないカンボジアにおいて、障がい児支援には資金調達が一にも二にも大切です。芦屋川ロータリークラブの会員であり代表の飯塚が常務理事を務める社会福祉法人三田谷治療教育院の元理事長である堺様から今回の機会をいただき、芦屋川ロータリークラブの皆様カンボジアでの障がい児支援の現状をお伝えできたことを本当に感謝いたします。高齢者や障がいのある子ども達が住みやすい社会を目指すことが、ひいては全ての人たちも住みやすい社会となる!! 小さな団体ではありますが、誰もが住みやすい社会を目指して挑戦し続けたいと思います。



○2月15日 明石市議会議員辰巳様が活動されている「明石倶楽部」で活動報告をさせていただきました。その際、会員の皆様が持ち寄られた品々のチャリティーオークションの売り上げ110,000円をご寄付して頂きました。本当にありがとうございました。

○2月28日 三木みどりロータリークラブ様の藤田会長と間瀬様にお会いし、助成申請のお話を頂きました。現地での障がい児者支援の理解を深める為に、カンボジア王国シェムリアップ州で活躍されている方たちを日本にご招待する視察費用をお願いしました。

○大森歯科医院待合室に設置してある募金箱には、2016年9月から2017年2月の6ヶ月で23,000円でした。又、焼き肉七輪神戸大蔵谷店様からは、募金箱の7,902円をご寄付していただきました。皆様本当にありがとうございます。

活動に賛同していただけた方に、スロラニプロジェクトの会員になっていただき、その会費を大切に支援活動費として使わせていただきます。ご協力お願い致します。

- 会員の種類 個人 団体
- 正会員 1口1000円(月会費) 1口10000円(月会費)
- 賛助会員 1口1000円(年会費) 1口5000円(年会費)
- ※賛助会員(個人)の年会費につきましては3口からお願いします。

○銀行振込  
みなと銀行支店：明舞支店(普) 口座名：特定非営利活動法人スロラニプロジェクト理事長飯塚由美子 口座番号：3895462

○郵便振替  
加入者名：特定非営利活動法人スロラニプロジェクト 口座記号番号：00980-1-172480

※お願い 恐れ入りますが、手数料についてはご負担をお願いします。

